

街道の軌跡



①

「坂下の馬鹿三里」という言葉がある。坂下の人に道を聞くと、何処に行くのにも「三里」「三里」とこたえるのだそうである。実際坂下から会津若松・喜多方・野沢・柳津・高田何処をとつても約三里（十二km）の位置にある。これは中世、坂下町の商業活動を保護するために、三里以内の商業活動を禁じたためである。

当時の越後道は勝負沢から青木・青津・立川から大川を渡って森台から米沢街道につながるものであった。慶長十六年（1611）会津大地震は勝負沢峠を通行不能にしてしまったために急遽束松峠・鐘撞堂峠・坂下をとおりる路線を越後街道の本街道にしたといわれる。

近世の街道は、幕府の交通政策に則ったもので各所に本宿をおき、その間を間の宿で補い荷物・人の輸送に厳しい掟を定めた。本街道となった越後街道では、坂下・塔寺・船渡・片門が本宿で、気多宮・天屋本名・峠の茶屋が間の宿であった。

気多宮の村外れは、越後街道と柳津道・沼田街道の追分であった。

「是れより左柳津路・是れより右越

後路」と達筆に彫られた追分石に、越後出るときやみんな来て来るが泣いて別れる気多宮」と唄った毒消し売りの娘達の哀願が滲んでいる。

鐘撞堂峠から西を望めば船渡・片門その間を只見川が流れ彼方には重畳と連なる束松峠の山並みが望める。束松峠は会津盆地をはるかに望む最後の峠であった。風雲急な幕末吉田松陰が越え、戊辰の敗残の將・秋月永胤が鶴ヶ城をのぞんで「行くに奥無く帰るに家無し」と断腸の思いを吐露したのもこの峠であった。明治十五年会津三方道路越後街道

は束松峠の険を避けて藤峠経由となると、人通りはばったりと途絶え沿道住民は生活の道を失ってしまった。住民は独力でこの峠に全長二百

に及ぶ洞門を貫き県道編入を迫った。しかし、時既に遅く時代は鉄道による大量輸送の時代に入っていたのであった。この峠を貫いて、今高速自動車道の工事がたけなわである。江戸時代新発田藩主溝口侯の参勤交替路でもあったこの峠は、首都と直結する磐越自動車道として生まれ変わろうとしている。



5

はじめに街道ありき

是れより左柳津路、是れより右越後路

古い道標は、行き交う人々を静かに見守り続けた。

越後からの毒消し売りやこせ、只見川下りの筏師などの宿場町として賑った街道沿いの追分では、

今も残る老舗のたたずまいが往時の面影を偲はせている。



2

3

4

- ① 天屋・束松旧街道の宿屋・松原屋の看板
- ② 昔のはたごやの面影
- ③ 越後街道の風情を伝える越後路追分道標
- ④ 土蔵造の宿屋
- ⑤ 今も残る宿屋のたたずまい
- ⑥ 宿場町の面影を今に伝える越後街道気多宮の宿